

アセスメントプロセスの解明

ーベテラン PSW への探索的調査ー

○日本福祉大学 田中 和彦 (7020)

大谷 京子(日本福祉大学・2998)、寺澤 法弘 (日本福祉大学・5898) 吉田 みゆき (同朋大学・4027)

キーワード：アセスメント、ベテラン PSW、探索的調査

1. 研究目的

ソーシャルワーク実践にとってアセスメントは要であり、アセスメント力はソーシャルワーカーの存在意義にかかわるとさえ言われている。そして多くのアセスメントツールが開発され、モデルやプロセス、網羅すべき項目の検討など、多くの先行研究の蓄積がある。しかし未だ用語の解釈も共有されておらず、具体的内容や作業方法については混乱がある。また実践現場では、標準化されないまま「職人芸」として展開されている。

そこで演者らは、PSW の研修プログラム開発を目的に、まず初任者がどのようにアセスメントプロセスを遂行しているかを明らかにした。経験年数 3 年未満の PSW を対象に調査した結果、初任者が失敗しやすいポイントを抽出することができた。それらは、①PSW の枠組みで、クライアントのスキルの査定を中心にする、②変換ミス（クライアントの言葉についてクライアントの真意を汲み取れないまま、PSW の言葉で異なる意味合いで言い換えている）、③話題の回避（クライアントが話したいと思われることについて、避けている）、④病理・欠損モデル（クライアントの問題点を抽出しようとする視点が強い）、⑤直線的理解（状態の原因探しに視点が偏重である（2012 年日本精神保健福祉学会において発表））である。そのことが初任者のアセスメントプロセスでの困難さであるといえる。以上を踏まえ、初任者が的確なアセスメントプロセスを遂行できる力がソーシャルワーク実践の質を高めると考えた。

そこで本調査では、ベテラン PSW の面接からアセスメントプロセスを解明し、アセスメントプロセスを可視化することを目的に、面接場面再現による質的調査を行った。

2. 研究の視点および方法

本研究では以下の 3 点の解明にせまる。①ベテラン PSW は面接でどのようなアセスメントプロセスを遂行しているのか、②その際のベテラン PSW の思考パターンに共通性はあるのか、③多様なアプローチによるアセスメントに差異は見られるのかである。方法として経験年数 20 年以上の PSW 2 名に、同一のクライアントによる創作事例を設定し、ある程度の情報を得ている 4 回目の面接場面のロールプレイを実施した。各ロールプレイは 20 分～40 分である。ロールプレイ終了後、調査協力者とクライアント役を含めてフィードバックをおこなった。面接場面のロールプレイおよびフィードバックは録音・録画し、

逐語データ及び画像データを分析した。分析については、「PSWの問いが何を意図して発せられたものか」「クライアントの言動の何を情報としてアセスメントにつなげているのか」「2名の面接プロセスとアセスメントの共通点は何か」という問いに基づいて、面接場面とフィードバックの内容分析を各研究者が個別におこない、それを持ち寄って検討するという手法を用いた。

3. 倫理的配慮

ロールプレイでは架空事例を用いた。調査協力者には研究の趣旨を口頭で説明し、録音・録画データは研究以外の目的では使用しないこと、研究の成果は発表することを約束し、調査協力の承諾を得た。その他は日本社会福祉学会研究倫理指針に従った。

4. 研究結果

ベテラン PSW のアセスメントプロセスは、仮説をもって問いを発し、クライアントからの回答を受けて検証しながらさらなる問いを発するという繰り返しであった。そのプロセスを通して、多様な項目が並列するようなアセスメントではなく複数の情報を積み上げてストーリーを形成し、「今ある問題」の背景を知ろうとする姿勢をもち、総合的・立体的な理解をしていくことがわかった。仮説検証を繰り返すために、面接のところどころで PSW が得ているアセスメントをクライアントにフィードバックし、共有を図ろうと試み、計画の見通しをもっていることがうかがえた。クライアントの反応や様子などノンバーバルな部分もアセスメントの際に必要な情報として用い、さらには、病理・欠損モデルではなく、クライアントのストレングスにアクセスできる視点を持ち合わせていた。

ベテラン PSW の思考パターンに対して共通性を見出すことはできなかった。また PSW によってクライアントへのアプローチの方法や面接スタイルも違うが、アセスメントの到達点については、共通する部分が多く見られた。

5. 考察

ベテラン PSW は、PSW としての経験と自身の人生経験、知識を踏まえた豊かな視点をもち、クライアントとの協働的な関係のなかで、仮説をたて、検証し、理解を深め、また仮説をたてるというスパイラルを用いている。そのことから、ソーシャルワークアセスメントは、アセスメントシートに記載された項目に沿った一問一答形式ではなく、面接の中で「行きつ戻りつ」を繰り返し、クライアント像を作っていくということをおこなう過程であると言える。アセスメントが共有されると今後取り組むべき課題とそのための計画も共有されやすくなり、そのことがクライアントの期待と一致したとき、PSW とクライアントの協働的な関係は一層深まることが示唆された。経験と知識、価値に基づいたアセスメントプロセスの言語化と一般化が今後の課題である。